

特集・新潟県の平和と子育て

戦後五十三年いまだ日本にはアメリカの軍事基地が日本政府の「思いやり予算」にも助けられて全国各地でおおきな顔で居すわっています。しかも、この米軍は日本防衛と縁もゆかりもない中東の紛争にまで出動して軍事活動を公然とくりかえしています。

国会に提出された「周辺事態」措置法案は先の橋本首相がクリントン大統領と「アメリカの戦争に日本は全面的に協力する」ことを約束した新「ガイドライン」を具体化するものだそうです。

平和な田園風景のひろがる越後平野、そこに住む私たちにもその黒雲が覆いかぶさるうとしてしていることをお伝えします。

平和をねがう深い思いを県民の各世代を代表するかたちで語っていただきました。

第二次世界大戦の惨禍を身をもって味わった世代か

らは新潟に落ちる可能性もあった原爆投下のこと、強制疎開のようすを聞きました。

戦後の生まれだが兵士としての適齢期になった息子たちを持ち、その息子たちに決して銃をとらせたくないと思ふ母の立場から、座談会で、また上越市の婦人の平和活動にもふれながら語っていただきました。座談会では従軍慰安婦をめぐる教科書問題もとりあげられています。学校の教育のありかたや親として平和への願いをわが子にどう伝えるかにも話題がひろがっています。「ピースエッグ in 新潟」の報告では青年たちが平和活動家に育っていく様子が伝えられます。新鮮な若人が育ってきているのを感じます。

平和を守る力の裾野は大きくひろがっています。

(編集部)